ストリートダンスにおけるパフォーマンスの向上要因について

スポーツコミュニケーションゼミナール　1314037　杉本　篤哉

１．研究動機・研究目的

ダンスは、昨年度から文部科学省の学習指導により、小学校、中学校、高等学校の保健体育の教材として取り入れられたことにより、非常に注目を浴びることになった。また、我が国のストリートダンス人口は400万人を超え､ストリートダンスが一過性の流行から、現代文化に浸透してきている傾向がみられる。教育の現場にダンスが取り入れられたことは、ダンス文化における一つの転機といえるだろう（中村, 2013)。

日本舞踊やサルサダンス、フラダンス、社交ダンスなど様々なダンスの種類が世の中に存在する中で、現代的なリズムとされているストリートダンスが現在日本では流行している。ストリートダンスを踊る EXILE、E-girls などのボーカル&ダンスグループの人気向上の影響などにより、ストリートダンスを始める子供たちが増え、若者を中心にストリートダンスの注目が高まり､ストリートダンスを踊り自己表現をしているダンサーに対し､人々は魅力を感じ、ストリートダンスを行ってみたいと思い始める人が増えている。

ダンスは、誰かに観てもらうことを目的としていることが多くある。そのためダンスをしている人は、自分のパフォーマンスをどう向上させていくかを考えることも多くあり、その向上要因についても多くあるだろう。

今後ストリートダンスの振興を考えていくにあたり、どのようにしたらストリートダンスへの注目が高まるのかという部分で、ダンサーのパフォーマンスが向上することによって、それを観た観客がストリートダンスを好きになる。その連鎖でストリートダンスへの興味関心が広がってほしい。さらに、ダンサーのパフォーマンスにはモチベーションが大きく影響するのではないかと考え、本研究ではストリートダンスを行うダンサーの視点から、どのような時にモチベーションが高まり、パフォーマンスが向上するのか、その要因をとらえ、今後のストリートダンスの振興のための基礎資料として提供することを目的とする。

２．研究方法

【調査対象】Ｊ大学ストリートダンス部に所属する学生 11 名

【調査期間】2017 年 6 月 28 日、10 月 18 日

【調査方法】フォーカスグループインタビュー調査

３．主な結果と考察

本研究のインタビュー調査に参加した学生は、Ｊ大学のストリートダンス部に入部するまで、ストリートダンスというジャンルのダンスをあまり理解していない学生が多くいた。

ストリートダンスを始めたきっかけについては、高校の友達や大学の先輩（直接的）、EXILEなどのボーカル＆ダンスユニット（間接的）といった第三者の影響が大きくかかわっていることが分かった。ストリートダンス自体は人口も増えてきているが、日本のストリートダンスの歴史はまだ浅いこともあり、文化として深く根付いていないため、今後は、日本におけるストリートダンスの文化を根付かせていくことが重要であると考えられる。ストリートダンスの魅力に関しては、競技スポーツでは味わうことのできないような勝ち負けだけじゃない楽しさを味わうことができること、ダンスには影響力があり人を感動させることができること、ダンスを通じてたくさんの人に出会うことができる、自分のイメージを表現することができる、自己表現をすることができるなどの意見があがった。すべての意見から、ストリートダンスには、ダンスの魅力だけではなく、人として成長させてくれるような魅力も多くあることがわかり、このような魅力が感じられることもストリートダンスを続けることへのモチベーションになっていると考えられる。

モチベーションの向上要因に関しては、会場が出来上がったときや衣装またはメイクをしたときなど本番の空気感を感じたときにモチベーションが上がる、また、観客が自分の踊りを観て沸いてくれた時や一緒に踊っている人の楽しそうな表情を見たときなどの周りの人の反応などもモチベーションの向上に影響することがわかった。これらのことから、本番ならではの空気感を味わうことができたときにモチベーションが上がると考えられるため、練習の段階でなるべく本番に近いような状況を作り出し、部員一人一人のモチベーションをできるだけ高い状態で維持し、質の高い練習を行うことが、本番で高いモチベーションで臨むために必要なのではないかと考えられる。

４．結論

本研究では、Ｊ大学のストリートダンス部に所属する学生にインタビュー調査を行い、その中でもダンス歴の長さがさまざまな学生から意見を聞いたが、ダンス歴によって有意な差はみられなかった。調査対象の学生は共通して、モチベーションがパフォーマンスに影響するという意見で、さらに、各々が各々のモチベーションの向上要因について深く理解していた。

５．卒業論文の執筆を終えて

本研究を進めるにあたり、指導教員である伊藤真紀助教の熱心なご指導に感謝いたします。また、グループインタビュー調査に快くご協力してくださった学生の皆様に心から感謝の気持ちと御礼申し上げます。本当にありがとうございました。